

令和 5 年 6 月 2 0 日現在

機関番号：3 2 6 9 2

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2022

課題番号：1 7 K 0 2 1 3 6

研究課題名（和文）地域資源を活かした新たな地域振興と芸術表現のかたち

研究課題名（英文）New forms of regional development and artistic expression utilizing local resources

研究代表者

酒百 宏一（Sakao, Koichi）

東京工科大学・デザイン学部・教授

研究者番号：9 0 2 9 3 0 2 6

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、2014年度に採択された「アートをまちにひらくことによる新たな地域振興と芸術表現のかたち」（26360079）における経緯をふまえ、地域における資源（大田区の町工場）を活かした美術表現活動（アートプロジェクト）をまちのなかで展開していくことによって、人や場所、まちの現在と過去、そして未来に向けたつながりを示し、これまでになかった地域における新たな交流や賑わいを生み出す地域振興の可能性を明らかにするものである。

研究期間中に新型コロナウイルス感染症による活動の自粛はあったものの着実に活動を積み重ね、概ね地域における資源価値の見直しや振興としての可能性を見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では文化価値の定まっていない近現代に営まれてきた市井の営みを文化資源としての価値を与え、その資源活用と可能性を確認するために地域内外の人たちとの交流やアートによるワークショップの独自の手法での協働制作を行った。

これまで産業の側面だけで見られてきた個人事業をまちの文化資源として見出し、学術的な研究としてアーカイブの構築と地域における課題解決の手法、さらには社会活動としての新しい芸術表現活動になりうることを明らかにした。またそれと同時に現在深刻化している地域の衰退や魅力を失いつつある地域に新たな魅力を創出し、未来のまちに対して継承すべき価値と取り組むべき活動として、社会的な意義がある。

研究成果の概要（英文）：Based on the background of the "New Regional Development and Forms of Artistic Expression by Opening Art to the Community" (26360079) adopted in FY2014, this research aims to demonstrate the connections between people, places, and towns in the present, past, and future by developing artistic expression activities in the community that make the most of local resources, and to identify the potential for regional development that will create new exchanges and liveliness in the community. The project aims to demonstrate the connections between people and places, the present and past, and the future of the town, and to identify the possibilities for regional development that will create new interaction and liveliness in the region. Although there was a period of self-restraint due to a new coronavirus infection during the study period, the project steadily accumulated activities and generally found potential for reviewing the value of resources in the region and for promoting them.

研究分野：デザイン

キーワード：地域資源の記録と継承 地域資源の掘り起こしと活用 アートプロジェクトの社会的役割 アートと共創する地域コミュニティ コミュニティとデザイン ソーシャルデザインとしてのアート 地域における持続可能な活動のデザイン 地域社会におけるコミュニティデザイン

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究において 2014 年度に採択された「アートをまちにひらくことによる新たな地域振興と芸術表現のかたち」(26360079) (図 1) での研究活動を基盤としている。この研究では、地域における資源の理解と活用を人々との協働によるアート表現を通して促すことで、新たな地域振興につなぎ、地域コミュニティでの芸術表現の社会的役割について研究を行っている。

(2) 研究の対象地域である大田区での資源として、本研究では町工場における営みを取り上げる。大田区におけるモノづくりの歴史は、戦前・戦後を通じて日本の工業の発展に大きく貢献してきた。しかし、時代の移り変わりとともに 1983 年をピークに町工場の数は、減少の一途をたどっており、基本的に個人の事業経営（一人親方）の技術で成り立っている場合が多く、技術の継承がなされないまま、本人が故人となった場合はそこで技術も途絶えてしまっている現状がある。(図 2)

(3) 日本の各地域で開催されているアートイベントは、2000 年以降地域の活性化や観光としての経済効果や魅力の創出などの目的で次々と開催されている背景がある。アートを媒介とすることで日常が非日常として体験されることや観光地でもないエリアが、作品を巡ることで、土地における文化や人との出会いにおいて再発見されるということにつながっており、地域振興の一つの手段として定着されつつある。(図 3)

2. 研究の目的

(1) 本研究では社会的な課題として、地域における資源を活かした新たな地域振興と芸術表現（アートプロジェクト）をまちなかで展開していくことによって、人や場所、まちの歴史と現在、そして未来に向けたつながりをつくり、新たな交流や賑わいを生み出していく地域振興の可能性を模索することとしている。また、地域固有の資源でもある町工場が減少する中で、こうした営みを貴重な文化資源として、写真などで記録し、また住民との協働作品へと還元することで、美的価値を見出し、その土地固有のくらしのかたちと文化への理解と興味、そして関わりを深めてもらうことを目的とする。

(2) 本研究以前の 2014 年から 2016 年までの研究活動において、研究代表者自らの美術の古典的な描画技法「フロタージュ」(図 4) を基にした独自の手法によって、参加者を特定せず、多様な作品としてのバリエーションを得られるアートによるワークショップをさらに展開させることにより、つながりを拡大し、町工場による営みを再評価することで、地域振興の新たな展開と芸術表現として社会課題につながる新たなかたちとして提示することを目的とする。

3. 研究の方法

(1) まちなかで芸術表現を展開していくにあたり、これまでの研究実績を基盤として定期的なワークショップにより、地域住民はもとより研究に関して多くの参加者をチラシの配布やインターネットを利用した Web サイトや SNS を通して募った。また本研究活動をアートプロジェクト「オオタノカケラ」と名づけ、展開した。



図 1「アートをまちにひらくことによる新たな地域振興と芸術表現のかたち」成果発表展示 (2016.11.26-12.4)



図 2 参考 解体撤去される機械と町工場



図 3 参考「大地の芸術祭」(作品：最後の教室、クリスチャン・ボルタンスキー)



図 4 本研究におけるフロタージュ制作例

(2) ワークショップでは、誰もが参加できるフロッタージュという描画技法を使用した。これは町工場で実際に使われた道具の上に紙を置き、色鉛筆でこするように描くことで、道具の凹凸が写し取ることができるもので、絵を描く際の能力を試されるようなある種の壁も取り払われ、比較的簡易に取り組めるものとして研究代表者がこれまでも多く取り入れてきた制作手法である。(図5)



図 5 ワークショップによる制作の様子

(3) ワークショップで使用する町工場で実際に使われた道具は、すでに研究資料として提供いただいた町工場で使用した旋盤工の道具を保管しているものを使用している。(図6) 現在のものづくりは先端的な技術開発によって機械化されてきており、経済成長期から稼働している汎用性のある大型の機械を扱う職人の工場や道具などは、産業資料としての価値もさることながら生活文化としての価値があることを仮定し、まだ価値づけがされていない地域における生業として記録しアーカイブする。



図 6 旋盤工職人の道具

(4) 研究の方法として行うワークショップには、ものづくりの現場に触れることや参加者自身の作品づくりとしての表現行為の体験が含まれるが、それらを定期的に行うことにも意味を与えている。大田区のものづくりの現場に集積していることで仲間まわしといった独自のネットワークによって発展してきた。その特徴をこのアートプロジェクトにも重ねている。つまり、それぞれがものづくりの現場の記憶を持った道具を写しとった作品をカケラ(断片)として全てつなぎ合わせた作品として見せることで、ワークショップでは見えなかったひとつの資源につなげるとした協働作業でもある。そして研究成果として展示会として開催することで参加者同士、町工場関係者、地域住民などとの交流機会を生み出すこととする。(図7)

り加工方法に特化した技術を持った中



図 7 ワークショップ作品をつなげる事例

4. 研究成果

(1) 本研究では、すでに観光資源として認知されたものではない地域における人々の営みを資源としていかに魅力として伝えられるかでもあった。すでにこれまでの取り組みのなかで、資源活用のワークショップを通じた手法によって得た成果を展開させるためにまず、地域資源それ自体をより多くの人に知ってもらう活動として閉鎖された町工場の公開と職人が扱う道具の展示会を企画し、実施することができた。(図8)

2017.6.18	町工場公開ワークショップ・さよなら町工場 最後の記憶 (旧綱島製作所→ギャラリー南製作所)
2017.11.25-11.25	町工場の道具展 (ギャラリー南製作所)
2017.11.25	ワークショップ・町工場の道具展 (ギャラリー南製作所)
2017.11.26	ワークショップ・町工場の道具展 (ギャラリー南製作所)



図 8 「町工場の道具展」会場の様子

(2) 本研究における2年目(2018)の活動は、これまでの活動を基盤として地域資源である町工場を活用した地域振興の展開を図った。5月と7月にこれまで大田区のなかでもあまり取り上げられることの少ない大田区東糀谷のエリアを中心として、準工業地帯や羽田道などの埋もれている魅力を一般の参加者と共に見て歩き、町工場跡をギャラリーにした会場で道具の写し取りのワークショップを行った。さらに11月にも東糀谷、西糀谷と2つのまち歩きコースを巡りながら、道具の写し取りに参加してもらうワークショップを2日間行った。このイベントには、上述したギャラリーにこれまでの作品を一部展示公開しながら開催した。(図9)



図 9 2018年に実施したワークショップの様子

また11月に行ったイベントでは、最終年度での研究発表の展示方法の検証を行った。これまでと違い支持体を持たない方法として今回は、天井の梁にワイヤーで渡して強く張ったところに、作品同士を専用のクリップでつなぎ合わせた。そうすることで壁面に頼らずに空中に作品を展示することができ、なおかつ常時作品を増やしたり、減らしたり更新することができるのである。(図7)

また10月には「アートと考古学国際交流研究会」にコミュニティと記憶をつなぐ実践事例としてプレゼンテーションを行い、町工場の道具も合わせて展示出品し、旧石器時代の道具と考古学研究でのつながりをもつことができた。(図10) 新たな地域資源の掘り起こしと異分野での研究領域との交流、また次年度での発表につながる試みを検証した。

2018.5.20,6.30	ワークショップ vol.5 (まち歩き→ギャラリー南製作所)
2018.11.24,25	ワークショップ vol.6 (まち歩き→ギャラリー南製作所)
2019.5.25	ワークショップ vol.7 (玉川パイプ→協和電材ガレージ)
2019.6.15	ワークショップ vol.7 (丸和銅材→柳原鉄工→協和電材ガレージ)
2019.6.29	ワークショップ vol.7 (川端製作所→協和電材ガレージ)
2019.7.6	ワークショップ vol.7 (まち歩き→協和電材ガレージ)

(3) 本研究の3年目にあたる2019年度は、地域振興活動として、大田区六郷地区で実際に稼働している4つの町工場を見学し、さらに町工場の道具をフロッタージュという描画手法によって写しとるワークショップを開催。4日間で延べ40人の参加があった。これまでの閉鎖された工場の見学とは違い、職人自らが工場を案内するなど現場での体験が何より貴重な機会となった。(図11)

これにより活動への興味を拡げることにもつながり、これまでの活動の継続から得られた新たな活動の展開のきっかけを得ることができた。

さらに本研究課題の成果発表について、大田区大森西にある戦前から存続している町工場の一角(図12)を借りて、これまでの活動で取り組んできた内容を紹介した。本研究の目的である地域資源としての町工場を自ら借りて、その場所で活動の成果を展示する意義は大きく、研究発表を空間として体験してもらうことや交流を通して理解や興味を持ってもらうということが、この発表展示会のテーマである『明日へのまちへの記録と継承』につながる取り組みであった。(図13, 14)

しかし、展示発表の期間(2020年3月6日から2020年3月8日)は、新型コロナウイルス感染拡大に対する影響で予定していた関係者によるクロストーク、研究発表(口頭発表)、ワークショップといったイベントを全て中止したため残念ながら参加者は少数となってしまった。成果発表についてはやむを得ない不測の事態により活動の自粛を余儀なくされたが、発表したという実績と展示の記録は今後の研究活動の展開として、また次に



図 10「アートと考古学国際交流研究会」での旧石器時代の道具と町工場の道具の展示



図 11 町工場見学とワークショップの様子



図 12 展示会場 (せき工場)

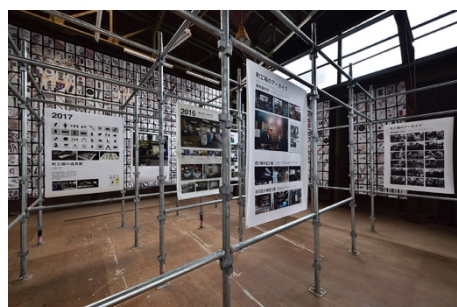


図 13 展示風景 (パネル)



図 14 展示風景 (協働作品)



図 15 研究成果発表展示会のチラシ (左:表,右:裏)

つながるものであると認識している。（参考：図15）

(4) これまでの研究活動を記録した冊子を発行した。（図16,17）研究活動は新たな地域振興につながる住民参加の協働作業や運営に関わる作業が主だったが、改めてまとめることを通じて本研究の現在地点を確認し、次の展開への足がかりとすることができた。

さらに研究期間全体を通じて本研究活動は、地域における持続可能な地域資源の継承と新たな地域振興の取り組みを実践し、その可能性を追究することにあつた。残念ながら新型コロナウイルス感染症の感染拡大により最終的な発表会での交流や共有機会をもつことができなかったため、正確な検証はできていないが、この新型コロナウイルス感染症による影響によって地域資源の喪失が進み、地域にとっての価値再発見や継承、そして持続可能性がさらに難しくなっている。本研究のさらなる実践的な取り組みを継続する必要性を感じている次第である。



図 16 研究記録冊子（表紙）



図 17 研究記録冊子（ページ内容例）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

オオタノカケラ2020ー明日のまちへの記録と継承ー
<https://koichisakao.org/otanokakera2020>
 オオタノカケラ2013-2020 -明日のまちへの記録と継承- 記録集pdfデータ閲覧ページ
<https://koichisakao.org/otanokakera2020>
 オオタノカケラ ウェブサイト
<http://www.sakao-lifeworks.com/otanokakera/>
 オオタノカケラ Facebookコミュニティサイト
<https://www.facebook.com/otanokakera/>
 オオタノカケラwebページ「さよなら 町工場 最後の記憶」
http://www.sakao-lifeworks.com/otanokakera/otanokakera_sayonara.html
 オオタノカケラwebページ「町工場の道具」展
<http://www.sakao-lifeworks.com/otanokakera/machikoba-tools.html>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------